様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2024
課題番号：２２Ｋ１２９８４

研究課題名（和文）明治以降の近代日本における信仰遺物の「語り」と「記憶」の研究

研究課題名（英文）A Study on the 'Narratives' and 'Memory' of Religious Artifacts in Modern Japan After the Meiji Period

研究代表者

三輪　地塩（Miwa, Chishio）

同志社大学・神学部・准教授

研究者番号：４０９０６６３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：キリシタンは織豊期～江戸期にイエズス会を中心に布教され発展したが、江戸幕府の弾圧によって潜伏キリシタン期を迎えた。この時宗教指導者が居なくなった事より信仰或いは信仰対象が「モノ」に移り、各地方で独自のモノを拝する文化が生まれた。キリシタンの存在が近代以降世の中に広まったのは大正～昭和初期であり、この後キリシタンに興味関心が向けられるいわば「ブーム期」を迎えることになる。この時期において「信仰対象」であったモノの模倣品が製作されたり、「来歴」や「言われ」の確実性が低いモノさえも、キリシタン遺物として各地で大事に扱われてきた。これらの現象を紐解き、信仰と遺物の関係について究明することが目的である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
キリシタン遺物とされるモノは世に多く存在する。例えば十字架、ロザリオ、壷、食器、日本刀の鍔など、聖遺物とされて大事に保存されてきた。しかしその多くが昭和期以降のキリシタンブーム期に作成された現代の模造品であることが多い。模造品に信仰という文脈から意味が付与されて世に広まるのである。このように、本研究の学術的な問いとその成果は、宗教言説の意味付与は如何にしてなされるかにある。近年、多くの人文学分野で学術的／非学術的といった画定によって隠蔽されがちなあらゆる種類の事象や叙述の創造的機能を解明する研究が増えている。本研究は、このような近年の学術的動向を踏まえた上でキリシタンに特化して究明した。

研究成果の概要（英文）：Christianity in Japan, or "Kirishitan," spread through Jesuit missionaries during the Azuchi-Momoyama to early Edo periods. However, with the Tokugawa shogunate persecution, the Kirishitan community entered the "Hidden Christian" period. In the absence of religious leaders, worship shifted to material objects, giving rise to a unique culture of venerating specific items across regions.It was only during the Taisho and early Showa periods that the existence of Kirishitan gained wider recognition, marking the beginning of a "boom period" in public interest. During this time, replicas of sacred objects were created, and even items with uncertain origins were revered as Kirishitan relics.This study aims to explore the relationship between faith and relics in Kirishitan history, focusing on how material culture preserved faith and identity among Hidden Christians and influenced later reverence for Kirishitan artifacts.

研究分野：宗教学

キーワード：キリシタン史　現代キリスト教史　キリシタン遺物　語り　叙述　イメージ形成　日本キリスト教史　日本宗教史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)明治以降、キリシタン研究が本格的に開始されたのはキリシタン禁制の高札が撤去された後の、明治中期からであった。初期キリシタン研究の動向については村上直次郎や、新村出などの優れた研究が知られるが、キリシタン研究を学問領域の一分野に引き上げたのは姉崎正治であった。姉崎はキリシタン研究を宗教学的見地から行い、『切支丹宗門の迫害と潜伏』を始めとした「キリシタン五部作」と呼ばれる著作群を次々と発表し、この分野を宗教学に体系付ける嚆矢となった。1930 年以降は、キリシタン研究を日欧文化比較的に行なうアプローチや、民俗学的立場からの考察（岡田章雄など）、歴史学を軸にした分析研究（海老澤有道など）がなされ、幅広い学際的な研究領域となっていった。

(2)太平洋戦争期間キリシタン研究は大きな発展を見せなかったものの、1950 年以降になって再開された。特に 1960－70 年代になると、イエズス会報告や会則、パリ外国宣教会（MEP）など西欧のカトリック史料（特にイエズス会関連史料）の発見並びに翻訳が進み、キリシタン史料そのものを批判的に分析する史料批判的研究の傾向をとっていく。又、高瀬弘一郎のように社会科学的方法によって行なわれる研究も現われ、キリシタン研究は更に多角的に広がっていった。一方、同時代の研究として「隠れ（潜伏）キリシタン」「カクレキリシタン」の研究も進み、大掛かりな学術調査によって、日本史学、民俗学的、日本宗教史学的見地から行なわれていくようになる。特に生月、平戸、天草、五島など地域別のキリシタン集団組織に関する研究が進んだのもこの頃であった。この研究は主に祖先崇拝など従来の日本宗教に焦点を当て、宗教変容論として土着化やシンクレティズムの立場から行なわれるものである。カクレキリシタン研究は、音楽・絵画の研究にも発展し、オラショを詳細に調べ上げ、迫害期前（キリシタン時代・織豊期～江戸初期）に歌われていた曲が、同時期のイベリア半島地域に存在していたミサ曲に由来することを突き止めるなど、宗教音楽史的研究も現われた（皆川達夫など）。また、カクレキリシタンの「お掛け絵」や「マリア観音」などに見られるキリシタン遺物についての実証的研究、すなわち製作場所や製作過程、使用方法などについて研究されるものも現われた。

(3)このように多角的多面的な研究方法に広がりながら成長したキリシタン研究であるが、尚も信仰的観点から検証されることが多い。日本宗教史やカクレキリシタン研究以外は、カトリック教会史の一分野として認識され営まれる。片岡弥吉などによって行なわれてきた迫害史・殉教史の観点から研究などもカトリック的視点からの成果と言える。一方で、キリシタンを社会的な営みや現象と捉え、カトリック信仰とは一線を画して政治的・法制度的観点からも研究されている。例えば、宗門改制度や村社会を切り口とした民衆史的研究や、民俗学的見地からは、キリシタンの習俗・葬祭儀礼研究、或いは迫害期前（織豊期～江戸前期）の同宿などのキリシタン組織が行なっていた福祉・教育などの相互扶助に関する文化的側面の研究などである。纏めると、キリシタン史研究は明治期に産声を上げ、1930 年代前後から学問分野として広がり、カトリック（キリスト教）研究のみならず、民衆史的・民俗学的・法制史的・文化芸術的視点で多角的な研究へと広がり、現在に至っている。このような学術的背景のもとで本研究を開始した。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、キリシタン・イメージが如何にして宗教遺物（聖遺物）との関係で創出され、どのように確定化（物語化）されていったかの過程と結果を探ること、更には、キリシタン・イメージの「言説」が再生産される原因と過程を歴史叙述の中に探ることがその目的である。

(2)本研究者の資料批判は、資料自体が持つメタ理論的方法によって行なうものである。史資料の書かれた内容について、書かれ方、書かれた方法、書かれた場所、書かれた意図などに注目し、資料内容が叙述者の記憶にあるステレオタイプに如何にして寄せられていくかを論ずる。キリシタンが叙述によって言説となり、キリシタン・イメージが産み出される。宗教共同体内は、その共同体内にある共通語（或いは Emic 言語）によって、共同体自体の歴史が言説化されて語るに留まらず、その語られた内容が無批判に固定化されたり神話化されたりする傾向にあると考える。このような宗教内言語によるイメージの「固定化」が如何に起こり、どのように影響が与えられているかを探ることが本研究の目的である。

３．研究の方法

(1)本研究は、明治以降の近代日本における信仰遺物、とりわけキリシタンの聖遺物に焦点を当て、その「語り」と「記憶」の研究を行うため、明治中期～昭和中期の時代に起こったキリシタン研究の勃興期から学術研究としての一分野を形成し学問領域とされるまでの時期において、キリシタンが如何なるものとして語られ、意味付与されたかについて究明するものである。その

ため、「聖遺物」とされるモノを実際に調査し、それらの「モノ」が持つ信仰的儀礼的な意味を、所有者並びに所蔵施設の学芸員等に聴き取りを行う方法を取った。

(2)本研究 3 ヵ年計画であり、初年度の 2022 年度は、2022 年 6 月 12－14 日の期間、長崎県平戸・生月におけるキリシタン聖遺物の調査を行った。平戸生月町博物館・島の館において学芸員中園成生氏への聴き取り調査並びに当該博物館の所蔵品の確認と撮影を行った。又福岡県福岡市に西南学院大学博物館にも研究調査を行い、学芸員鬼塚芽依氏により所蔵品の説明を受けた。

(3)2 年目 2023 年度は、かつての潜伏キリシタン、ならびに現在のカクレキリシタンの居住地域である長崎県五島市・新上五島町の調査を 2023 年 7 月 31 日－8 月 5 日の期間で行った。福江島では「堂崎天主堂キリシタン史料館」、久賀島では潜伏キリシタンの末裔の方からのインタビュー調査、奈留島では、阿古木キリシタンの里資料館と館長柿森一年氏への聴き取りと所蔵品の撮影を行った。

(4)3 年目（最終年）の 2024 年度は、2024 年 7 月 30 日－8 月 3 日に竹田・天草のキリシタン調査として、竹田キリシタン資料館館長後藤篤美氏への聴き取り、崎津資料館みなと屋の学芸員中山圭氏への聴き取り調査と資料撮影、また天草キリシタン館館長平田豊弘氏への聴き取りを行った。

(5)上記の研究調査の結果を用いて、9 月 21 日(土)西南学院大学博物館において企画展Ⅱ「創られたキリシタン像（イメージ）排耶書・実録・虚構系資料 ―明治以降のキリシタン・イメージ― 形成過程とその所産」が開催され、研究報告を行い、シンポジウムに登壇した。それに先立ち、『創られたキリシタン像』に研究成果としての論考が掲載されている。シンポジウムでの発表内容は、2025 年度中に論文として纏め、何かの紀要や論文集から発行する予定である。

## ４．研究成果

この研究助成期間中に上げた研究成果は以下の通りである。

論文：
(1)三輪地塩「「キリシタン」が日本宗教に与えた意義と影響、そして「意味」」『福音と世界』(79 巻 7 号)、新教出版社、2024 年、24－29 頁。（招待有・執筆筆頭者）

講演録
(1)三輪地塩「キリシタン研究の現在 ―キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察―」『基督教研究』(85 巻-2 号)、同志社大学神学部基督教研究会、2023 年、19-33 頁。（招待有り・筆頭著者）

著書：
(1) 鬼束芽依編『創られたキリシタン像 ―排耶書・実録・虚構系資料―』(担当:分担執筆,範囲:「キリシタン研究の発展とキリシタン資料・遺物の「発見」史」(pp.48－51）)、花乱社／発行西南学院大学博物館、2024 年（共著書）

講演・シンポジウム等：
(1) 三輪地塩「キリシタン研究の現在 ― キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察―」基督教研究会 公開講演会、2022 年 11 月 25 日（於・同志社大学・招待有り）

(2) 三輪地塩「長崎「原爆」言説の相克 ― 浦上キリシタン・被差別部落・永井隆―」京都大学 YMCA 地塩寮講演会、2023 年 12 月 17 日（招待有り）

(3) 三輪地塩,松谷信司 「ニッポンのサブカルと宗教の意外な関係」クリスチャンプレス主催、オンラインセミナー、2024 年 1 月 12 日（招待有り）

(4) 鬼束芽依,中園成生,三輪地塩「明治以降のキリシタンイメージ ―形成過程とその所産―」西南学院大学博物館 公開シンポジウム 2024 年 9 月 21 日（招待有り）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三輪地塩 | ４．巻<br>1 |
| ２．論文標題<br>キリシタン研究の発展とキリシタン資料・遺物の「発見」史 | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>『創られたキリシタン像』 | ６．最初と最後の頁<br>48－51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三輪地塩 | ４．巻<br>79 |
| ２．論文標題<br>「キリシタン」が日本宗教に与えた意義と影響、そして「意味」 福音と世界 | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>『福音と世界』（79巻）7号 | ６．最初と最後の頁<br>24ー29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三輪地塩 | ４．巻<br>85巻第2号 |
| ２．論文標題<br>キリシタン研究の現在―キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察― | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>基督教研究 | ６．最初と最後の頁<br>19－33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>三輪地塩 |
| ２．発表標題<br>明治以降のキリシタンイメージ―形成過程とその所産― |
| ３．学会等名<br>西南学院大学主催公開講演会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2024年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三輪地塩 |
| ２．発表標題<br>キリシタン研究の現在―キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察― |
| ３．学会等名<br>同志社大学 基督教研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>朝岡　勝、松谷曄介、森島　豊 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>教文館 | ５．総ページ数<br>188 |
| ３．書名<br>夜明けを共に待ちながら | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 同志社大学神学部・神学研究科 オープンコースウェア（OCW）<br>https://ocw.theo.doshisha.ac.jp/movie/?pk=1672025198 |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|